

佐山家の惜春

作：栗木英章

〈キャスト〉

佐山道夫 旧制中学校国語教師(休職中)

文子 長女 内職をしている

絵美 次女 ダンスホールの踊り子

山本忠男 復員兵(足を負傷)大工

野村妙子 中学校国語教師

太田洋子 その教え子

石黒民代 文子の友人 紡績女工

加藤せつ 近所の主婦

岡野進 復員兵

〈とき〉

昭和21年(1946年)3月 ある日の午後

〈ところ〉

佐山家の居間

舞台より外れたところに桜の木が一本ある

開幕前(今回の二つの組合せの場合は休憩時間後半)、
昭和20〜21年に流行った歌が流れる。

例えば「リンゴの歌」「愛のスイング」「ニュー・トーキョー・ソング」など。続いて次のようなラジオニュースが放送されて、お客をその時代へと誘う。

ラジオ放送「……続きまして、政府は憲法改正政府草案を発表しました。その基本は主権在民・象徴天皇・戦争放棄にあり、マッカーサー元帥も全面的な承認を表明しております……」(雑音と共に途切れる)
やがて「物売りの声」と共に幕が上がる。

1

佐山家の居間。

上方から山本が屋根を修理している音が時々聞こえる。

文机に向かって本を読んでいる佐山とお茶を用意している文子。
時折り、桜の花びらが舞い散る。

文子 咲いたと思ったら、もう……。

佐山 ……(ポツンと)散る桜、残る桜も……。

文子 何です？

佐山 ……ふむ。

柱時計が10時を打つ

文子 お茶を――

佐山 (同時に)絵美はまだ――

文子 ええ。

佐山 (同時に)ああ。

文子 山本さん、お呼びします。(腰を上げる)

佐山 あいつは――。

文子 なに？

佐山 ふむ。

2

文子 なかなか家へ入ってくれないけど、もう一度ー。
佐山 どこかで、泊まってるのか。

文子 誰。ああ、絵美。

佐山 ふむ。

文子 さあ……。

佐山 困った奴だ。

文子 「嫁入り前の娘がー」

佐山 ふむ。

文子 結婚なんて……。今の絵美にはとても考えられないと思う。

佐山 ……森のことか、それはー

文子 どんなに思っても帰ってこないのはわかってる、特攻隊に行った時から覚悟はできてたろうけど……。現実になってみると切り換えるのに時間はかかるわ。そして、森くんの戦死の始まりは予科連よ。志願すべきかどうか、家に相談してきたとき、お父様は止めなかった、あの時がー。

佐山 言うな……。そのことは、もう……。

文子 ごめんなさい、ついー。

佐山 いや……。ふむ。

文子 絵美は、今のお父様と一緒にです。生きるハリを失って、さまよっているんです。

佐山 私は、さまよってなんかいない。

文子 では、なぜ学校へお戻りにならないんですか。

佐山 ……

文子 (ハガキを示して) 今日、学校から野村先生がお見えになります。会って下さいね。

佐山 ……

文子 もし、このままの状態が続くのなら、私、勤めに出ますから。

佐山 外で働くというのか。

文子 だって……。戦争に負けても、私たちは食べてゆかなくちゃならないんですから。

佐山 ……お前も、強くなった。

「ごめんください」の声

文子 はあい、(玄関へ去る)

佐山 (妻の遺影に) おい……一日が……長い……時間はあるのに……頭の中はもやもやして、霧の中だ、まったく――

文子 どうぞどうぞ(姿を現して) お父様、友達の石黒さん。

石黒 石黒民代です。お邪魔します。

佐山 ああ、どうも。文子、山本くんには、私がナニしよう。うん、まあ、いつものように外で――

文子 だったら、(お盆にお茶を手際よくのせて) お願い。

佐山 ふむ。(去る)

文子 座って。(と言いつつお茶を出す)

石黒 (佐山を目で追い座りながら) それで、まだ学校へは――

文子 (頷いて) 頑固なの。

石黒 でも、教え子を戦場に送り出してしまったことと向かい合ってるなんて、誠実

な先生だわ。学校じゃ、みんな素知らぬ顔で教科書の都合の悪い所は墨塗りして「民主主義」を教えるんでしょ。

文子 (石黒を見つめる)

石黒 なに？

文子 だって……

石黒 なによ。

文子 変わった、あの大人しかった民代が。

石黒 ふふ……。工場でもまれてるから。

文子 それで、どう、何とかなりそう？

石黒 そりゃ紡績工場は働き手を求めているから。

文子 私のような年齢でも大丈夫？

石黒 (頷いて) でも辛い仕事よ。

文子 覚悟してる。

石黒 二交代制でね、早番は朝五時から午後二時まででなんだけれど、起床ベルが鳴るのは四時十五分。

文子　へえ、まだ真つ暗ね。

石黒　そう。とにかく五時の始業サイレンまでに紡績工場のミユールに――
文子　なに、それ。

石黒　精紡機せいぼうきつて機械。その二台分のスピンドルに（疑問顔の文子に気付き、鞆たぼからチラシを出して）マシン油をささなきやならないの。

文子　（チラシを見ながら）機械がいつばいね。

石黒　仕事は立ちつばなしの、歩きづめ。ホラ、足がこんなにむくんでる。

文子　大変そう。

石黒　紡毛のほりがいっぱいくつুকから、仕事終わりにはホウキで体を払わなきやならないの。

文子　ねえ、通いじゃ無理かしら。

石黒　少しはいるけれど……ちよつと、それよりマーケットのお店かなんかあつた方がいんじゃない。

文子　環境を変えて一からやり直したいの。

石黒　（文子を見つめる）

文子　うん？

石黒　逃げようとしているな。

文子　なによ、急に。

石黒　父親、しがらみ――

文子　違う。

石黒　男。

文子　……

石黒　凶星。

文子　違うつてば。（少し涙ぐむ）

石黒　ごめん。（ハンカチを出す）どうぞ。

文子　……ありがと。

石黒　（口紅を出して）はい。

文子　何。

石黒　少しはお化粧して雰囲気を変えなさい。

文子 だつてー。

石黒 だつても待つてもなし。(と強引に文子の唇に口紅を塗り、手鏡を見せる)
ホラ。

文子 やだ。

石黒 逃げないでじつと見るの。

文子 (素直に手鏡の自分を見つめる)

石黒 きれいよ。元始女性は太陽であった……。自分から曇らせてはだめ。

文子 私……。和裁のことしか知らないから。

石黒 人間変わるのよ、時代が変わったんだから。

文子 そう……。そうね。

石黒 今から工場へ戻るから、事務所に聞いたげる。

文子 お願い、私、頑張るから。だつて私が働かなきゃ食べていけないもの。

石黒 その意気。いただきます。(お茶を一口飲む)おいしい。

文子 静岡の親戚から送ってくれるの。家でましなのはこれのお茶だけ。

石黒 そうそう、妹さんー

文子 絵美がどうかした？

石黒 うん。私、もう行かなくちや。

文子 ねえ、絵美を見たの？

石黒 ……駅前のダンスホール(又はキャバレー)から出てくるところを……。

文子 誰かと一緒だった？

石黒 ……アメリカ兵と。

文子 ……そう、アメリカ兵とー。

石黒 まあ、こういう時代だから、それも一つの生き方かもしれないけど……。

文子 何もかも、ひっくり返っちゃたからね。

石黒 また連絡する。

文子 ありがとう。本当にお願ひね。

石黒を去るのを文子は見送る

無人の間

鳥のさえずり。物売りの声が通り過ぎる。

やがて戻ってきた文子は、鏡を見て少しためらった後で口紅をしつかり落としてから、片付けをしつつ、ふと机上の佐山が広げていた本(万葉集)を見る。

文子 「世の中に 絶えて桜のなかりせば 春の心は のどけからまし」……。教えればいいのに……。(母の遺影に)ね、ほんとお父様頑ななんだから……。

裏口からといった感じで絵美がそつと入ってくる

絵美 死者は帰らずー

文子 絵美!

絵美 シッ。

文子 どこで泊まってきたの。

絵美 友達のところ。

文子 どういうー。

絵美 誰でもいいでしょ。

文子 男の人?

絵美 さあ。

文子 答えなさい。

絵美 (投げやりに)どっちでもいいでしょ。

文子 お酒飲んでるのね。

絵美 ふふ……カストリ焼酎じゃなくてブランディよ、ブランディー。(息を吐く)

文子 (絵美の頬を叩く)いい加減に目を覚ましなさい!

絵美 いったって目は覚めてるわよ。夜中でも、特攻隊の飛んでく音が頭に響いて、眠れることなんかないわ!もう……もう私の人生、終わってるの。放つといて!

文子 絵美……あなたはまだ若いのよ。森くんことは忘れて、もう一度出直すの。

絵美 ……出直し か……。帰りの燃料は積まれなかったあの人たちには、思いも浮かばない言葉ね。

文子 だからこそ、生き残った私たちは、一生懸命生きるの。ねっ。

絵美 姉さんー

文子 なに？

絵美 姉さんこそ、あの山本さんとやり直したら。

文子 何言うの。

絵美 知ってるわ、あの人、昔っから姉さんのこと好きだったのよ。

文子 いい加減なこと言わないで！

出征前にこの家の近くを往ったり来たりしていた。私がどうぞ中へと行ったら真つ赤になって走り去ったわ。きつと戦地へ行く前に姉さんに一言伝えたかったのよ。

文子 今ごろ、そんなことをー。

絵美 あの時も姉さんに伝えようとしたら、怖い顔して遮ったじゃない。

文子 あれは空襲警報がー。

絵美 ほら、すっかり覚えてる。

文子 ……(思わず もう一度唇を拭う)

絵美 可哀想に山本さん、足を負傷した今では、気持ちを伝えようにものみ込んで、

トントントン釘を打ってる……。残酷よ。

文子 ……生意気いって。(涙ぐむ)

絵美 泣かない……。女はもう泣かない、泣くもんか。

文子 お父様を……。一人にはできない。

絵美 いいの、父さんなんか天罰。

文子 絵美のこと、とても心配してるのよ。

絵美 うそ。

文子 ゆうべも眠ってないわ。

絵美 ふふふ……。もう、汚れきって、これ以上堕ちませんからご心配なく。

(ゴロンと横になって、ふと口ずさむ)♪ゴーン アーザ ウエイ……

文子 ……その人、優しくしてくれるの。

絵美 その人って？

文子 ……アメリカのー。

絵美 うん。この間ね、町のチンピラに絡まれたとき、あの人いきなり銃を抜いて

「ホールド・アップ！」連中びつくりして逃げていった。

文子 ……騒ぎに巻き込まれると、危ないよ。
絵美 ふふふ…ははは…戦争ほど危ないなんて事、もうない。今は平和、ピース。

佐山と山本の声が聞こえる

絵美 姉さん、私のこと黙ってて。

文子 どこに？

絵美 納戸で寝てるから。お願い。(素早く去る)

文子は取り繕うようにラジオをつけると「リンゴの歌」が流れる。
やがて、佐山が戻ってくる。

佐山 (玄関へ向かって)ポツリときたから、今日はもうしまつて。

山本 (声)ここで待たせてもらいます。

佐山 (強く)いいから入りなさい。

文子 ほんと、上がつて下さい。

間

山本 (上がり框まできて)じゃ、お言葉に甘えて。

佐山 ほれ、ここへ来て。

山本 いえ、ここで。(頑なに動かない)

佐山 もう、あがりだろ。いっばいやろう。

山本 本降りになるのは夜です。今日中に直してしまいます。

佐山 ほう、天気予報より正確か。

山本 戦地で鍛えられましたから。

佐山 ……

文子 お疲れ様です。(お盆を片付ける)

山本 ごちそう様でした。あの一。

文子 はいっ。

山本 すみませんが……それ、止めて……。
文子 はっ？（山本がラジオを見つめるので）ラジオ。
山本 （頷く）
文子 はい。（切る）
山本 すみません。
佐山 歌が好きだったんじゃないのか。
山本 はあ……。
佐山 たしか、音楽の土井先生が君の歌を誉めてー。
山本 よして下さい、昔の話は。
佐山 そうか……そうだな。
文子 お父様のまわりは昔のことばかり。
山本 すみません。
文子 ふふふ……
山本 はっ？
文子 謝ってばかり。

山本 どうもー
文子 「すみません」。
山本 えっ、はあ……（文子が眩しく）何だか……、明るい歌を聴くと……居たたまれな
文子 いんです。
山本 ……
山本 おかしいと思われるでしょうが……。こうして、普通に生きているのが申し訳な
い気持ちになつてー。
佐山 わかる。
山本 先生。
佐山 むっ？
山本 わかりますか。
佐山 わかる……つもりだ。
山本 自分は……雨が降ると気持ちが少しだけ休まりました……。血の臭いが洗い流
されるような気がして。だから夢中になつて林の中へ走って行ったんです。そこ
で足をー。

佐山 ……すまん。
山本 先生―。
佐山 時局にのり、生徒達を戦地に送り出した―。

間

山本 自分達の時は、先生、作文ばかりの授業で―。
佐山 それもすまん。
山本 戦地でも日記をつけていました。
佐山 そうか。
文子 あの、今度見せて頂けます？
山本 はあ…。上等兵に見つかって燃やされました、軟弱だと張り倒されて。
文子 そんな―。
山本 すみません、余計なことをしゃべりました。

「ごめんください」「こんにちは」の声

文子 はい。(立つ)
佐山 文子、学校からだったら「会わない」と伝えてくれ。

文子は玄関に去る。

山本 先生、学校に戻ってください。
佐山 ……もう…。子供達に教える資格はない。
山本 教えようとしなくて、自分達の時のように作文を書かせて、逆に教われればいいじゃないですか。その気持ちを取り戻せば―。
佐山 山本―。
山本 生意気言いました。
佐山 ……君は、嫁を貰わんのか。
山本 ……。

佐山 気持ち分るが……。失敬、簡単に分ると言えんな。
山本 そんなー
佐山 ムシのいい話だか……。文子は未だに一人なので……。ふむ。
山本 きつと幸せな縁がきます。(立ち上がり)仕事、続けてきますから。
佐山 このまま一人、大工でいくのか。

文子が玄関に気を使いながら戻ってくる。

山本 一区切りついたら岐阜で百姓をー。
佐山 岐阜で。
山本 郡上が在所だもんですから。
文子 お父様、野村先生と生徒代表の方がー。
佐山 ……。
山本 先生、文子さん達のためにも学校へ。(頭を下げて去る)
佐山 ……日記をつけていた、か。

文子 お父様。
佐山 (頷いて)会おう。
文子 はい。

文子は再び去る

佐山 (本をしまいながら)……梅の花 咲きて散りなば 佐九良婆那 継ぎて咲くべく
なりにてあらずや……。

文子が野村と洋子を案内してくる

文子 お父様。
野村 お邪魔します。
佐山 おお。

洋子　こんにちは。
佐山　君は確かー。
洋子　三年の太田洋子です。
佐山　ふむ。万葉集を全部暗記したー。
洋子　はい。そのかわり、教育勅語はなかなか覚えられませんでした。
佐山　いい、いい。覚える必要はなかったんだ、(躊躇いつつ、はっきりと) あんなもの。

文子はお茶の支度をする

野村　佐山先生、早速ですが、単刀直入にお話します。新学期から学校へ復帰して頂きたいのです。

佐山

……

野村　先生の休学届に添えられたお手紙は拝読しました。私も、どうか教壇に立っている教師一同忸怩たる気持ちを引きずっています。しかし、今私たちが戦争の反省に立って、教育を立て直さないと、日本の戦後は始まらないのです。

佐山

……野村先生、言われることはわかります。若い先生方がその役割を担っていけばいいんです……。私は……その資格をなくしたし……何より、もう教育への情熱が持てないのです。

洋子

先生、私たちは佐山先生の国語の授業が楽しみでした。あの、山部赤人の歌を教えて頂いた時、教室がどよめいたこと覚えてみますか。

佐山

さあ……

野村

あしひきのー。

洋子

はい。ヤマザクラスナ山桜花　日並べて　かく咲きたらば　いと恋ひめやも

佐山

……そんなこともあったな……(沈む)

野村

先生。

佐山

……そんな君たちを愛知時計へ学徒で送り込み、多くの生命が奪われた……

洋子

(泣く)

野村

先生……(も誘われるように泣く)

野村

戦争だったのです。誰も止められませんでした。悲しいけれど、悔しいけれ

ど…。

佐山 否。大人達は、少なくとも教師は命を賭けて生徒達を守るべきだったんです。現に、そういう人たちが存在していた—。

間

鳥のさえずり

野村

…近くの爆弾池の辺りを蝶々が飛んでいました。先生、焼け野原にもタンポポが咲き、再生の暮らしが始まっています。10月には人間天皇陛下下の巡幸が愛知へ参ります。その時までにはこの地で立派な民主教育と一緒に根付かせようではありませんか。

佐山

天皇巡幸に東京では万歳と禁止されている日の丸を持って迎えたようだが、私は…。(ふと洋子を見る)この話は—。

文子

(茶菓を出しつつ)太田さん、庭の桜を見ましようか。父が生まれた時に植えたんだつて。

洋子

ありがとうございます。あの—

野村

先生、生徒には何でも話しましょう。私、そうしています。

文子

…そう、そうね。

佐山

…

野村

先生。

佐山

…

文子

いつも口を閉ざしてしまってます。(文子は懐から紙を取り出して)そのかわりに時々の気持ちを書き記しているんです。

佐山

お前、それは—。

文子

チリ箱から拾いました。捨てるべきものじゃないと思って。読んでいいですよ。やめなさい。

佐山

だったらお父様の口から直接—。

文子

(文子を見つめる)

佐山

「お前は強くなった—」

野村と洋子は笑いをこらえる。佐山はぶいと立ち上がり隣の部屋へ去る。

文子

(読む)ソ連やオーストラリアの国が巡幸に反対しているのに、アメリカは肯定も否定もしなかったのはなぜか。4月からの東京裁判では、今の流れから戦争責任があいまいにされていくのではなからうか。結局、学校に戻れば、私たちの反省もなし崩しとなり、五十年、六十年先には再び教え子を戦場へ送り出す事態にならないかと深く憂慮する…。

野村

そこまで、佐山先生はー。

文子

なんだか、私、口惜しくって。

野村

先生の大学の恩師は、確か河上肇先生でしたね。

文子

はい。1月、亡くなられる前に手紙を頂いているんです。父が重い口を開いて少し話してくれたんですが、河上先生も日本の再出発のあり方に危惧をいだかれて、新憲法へのご意見と期待を表明されたと。

野村

教師の中には、佐山先生のようなお考えの方もいらつしやいます。ですからまずは学校での真摯な話し合いからあるべき道がみえてくるのではないかと。

文子

はい…。(隣の部屋の父を見る)

野村

(隣に向かって)先生、4月には衆議院議員選挙もあります。新憲法と共に私たちの教育基本法も生みださなければなりません。

佐山

…。(ポツンと)社会は…動いてるとー

野村

そうです。万葉集を教えるのも速慮しなくていいのです。

洋子

佐山先生、生徒一同お待ちしています。

佐山

…ありがとうございます…

野村

お願いします。

二人立ち上がる

文子

わざわざありがとうございました。

そこへ絵美がそつと顔をみせるが、佐山に見つかる

佐山 絵美！
絵美 あーっ。
佐山 今までどこへ？！
絵美 ちよ、ちよとお便所(走り去る)
佐山 絵美！
文子 お父様！
佐山 (ふと我にかえり)ふむ、すまん。
野村 では、私たちこれで失礼します。
洋子 ありがとうございます。
文子 このお菓子、持って行って。
洋子 はい、頂きます。(受取り)さようなら。
佐山 ふむ、気をつけて。

文子 野村 洋子 去る

佐山 (独り言)みんなしつかりしているというのにあの絵美は……(遺影に)お前が甘やかしたせいだ……。ふう……。こんなことを言うとな河上先生にお叱りを受けるか……。

文子と絵美が戻ってくる
間

文子 さあ。
絵美 ごめんなさい。(頭を下げる)
佐山 まともに働きもしないで、毎日何をしているんだ。
絵美 ……。
佐山 父さんの眼を見て答えなさい。
絵美 父さんと違って働いてるわ。
佐山 何をしてー。
絵美 歌ったり踊ったり。

佐山　それが仕事か。

絵美　そうよ。(ポケットからお金を出して)生活費。インフレで金の価値は下がりがつばなしだけど、お金はお金よ。

佐山　そんな汚れたお金はいらん。

絵美　へえ、父さんは汚れてないというの。

文子　絵美。

絵美　良心に苦悩しているようだけど、結局姉さんを家にしばりつけて、好きな本を読んでもらうだけじゃないの。

佐山　くっ(思わず手をあげる)

文子　やめて！

絵美　殴ればいいじゃない。殴ってすむなら軍隊と同じでしょう。

佐山　……

文子　絵美、お金はいいから、あなたはこれからどう生きていこうとしているの。

絵美　歌手になる。

文子　歌手？！

佐山　歌手？！

絵美　コロンビアが新人歌手を募集している。オーディションを受けるの。

佐山　やめろ。

絵美　なぜ。歌手も立派な仕事よ。「リンゴの歌」は国民に明るい希望を抱かせてくれた。私、名古屋の一次予選を通過したのよ。(立ってスイングしながら歌う)
♪屋根が見えます　赤い屋根がー
出て行きなさい。

佐山　お父様。

佐山　母さんも、そんな生き方を望んではいない。

絵美　何よ、母さん、母さんで。母さんも本当は好きなこととして翔びたかったのよ。

森君も、みんなみんな。戦争と、大人と、男の横暴なんか押しつぶされなくて、自由に未来へ羽ばたきたかったのよ。(泣きながら走り去る)

文子　絵美！(後を追う)

佐山は深いため息をついて座り込む。

屋根を修理する音が聞こえる。

間

佐山 (妻の遺影にポツンと) そうだったのか。お前は、羽ばたきたかったのか……(窓から空を見上げる) 季節は変わりなくめぐってくる……。

桜の花びらがひらひらと散る

思いに沈み込む佐山

溶暗

桜の木に明かり

酔っ払って眠り込んでいる岡野

そこへ真白にDDTを被った加藤せつが登場する

せつ (行き過ぎようとするが、気になって) ちよつと、ちよつと――

岡野

……

せつ む、酒くさい。あら、川向こうの岡野さん、こんなとこに眠り込んで、だめでし

よ。(揺り起す)

岡野 (目を覚まし、白いせつを見て) ヒヤァー(突き飛ばす)

せつ (も、驚いて) な、なにをするの?!

岡野 敵兵! 鉄砲、鉄砲。撃ちてしやまん。鬼畜米英め!

せつ ちよつと、私、加藤せつです。

岡野 ウオーオ!

せつ 助けて!(走り去る)

岡野

(夢幻の中で) おい、大丈夫か。敵兵は逃げたぞ。おい、もうすぐ援軍が来る、しつかりしろ! おい。(泣きながら立ち上がる) ♪貴様と俺とは同期の桜、同じ国体の庭に咲く……。気を付け! 武藤二等兵を送る。捧げ銃。撃て! 撃て! 撃て! (ふと、我に返り、がっくりと肩を落とす) 夢、か……。転がっていた酒の雫を飲み干して) 終わったのか、本当に戦争は、終わったのか……。畜生、どうして、桜の花だけは咲くのだ……。 (さみしく) ♪咲いた花なら……。散るのは覚

悟……(崩れ落ちる)

岡野を思いやるが如く、桜の花びらが散る

照明はコ〇して、再び佐山家へ移る

その日の夕方近く

手紙をしたためている佐山。物売りの声が通り過ぎる

やがて奥より賑やかな笑い声等と共に文子と近所の主婦加藤せつが出

てくる。まだ白いDDTが残っている

文子 　ほら、まだここにもついている。

せつ 　やだ。こんなのかけられちゃ、アメリカ兵に間違える人も、ねえ。

文子 　(払ってやりながら)誰なの。

せつ 　ほら、いまだに、気をつけ、突撃って叫んでるー

文子 　ああ、岡野さん。

せつ 　桜の木の下で酔っ払って、いきなり敵兵って突き飛ばすんだもの。

文子 　まだあの人の中では戦争、終わってないんですね。

せつ 　腹も立つたけど、可哀想な気もしたね。みんな戦後だ戦後だと言って、竹槍命令したお方までハイカラさんに舞い上がってるんだから。私なんか、今でも部屋の電気が付いていると、つい黒布かぶせようとしちゃうよ。(DDTの粉に咳き込む)

文子 　はい、お水。DDT散布、断れなかったの？

せつ 　できるもんかね。通りがかりの子供達が、あの、ほれ、パンパン遊びというへんなことやってたから「ダメ」と駅前の方へ追いかけて注意してたら、いきなりバアツと。

文子 　伝染病が流行ってるからね。

せつ 　フン、もとはと言えば進駐軍への伝染対策なのにさ。ああ、戦争に負けた国の宿命なのかね。

佐山 　これでいいかな。

せつ 　書けました？

佐山 　まあ、せつさんの言ったことは大体盛り込んだつもりだが……。

せつ 先生、ありがとうございます。

佐山 満州まで無事届けられるといいのだが。

文子 早速郵便局へ持って行って頼んでみるのよ。

せつ はい。すぐにー。

文子 ご主人、早く戻れるといいですね。

せつ 四月には、こがね丸という舟で釜山から博多へ二百人ばかり帰国するという

だけけど、家の人が入ってるかどうか何も分らなくて。

文子 希望を持って待つことね。

せつ そりやもう、あの人が帰ってこんことには、家の戦争は終わらんから。

文子 ……そうね、どこの家も、まだ戦争を抱えてる。

せつ 先生。

佐山 うっ？

せつ 現地の兵隊が戦犯で捕まるというニュースをやつてたけど、それはー。

文子 そうそう、マニラやシンガポールなど五十ヶ所くらいに法廷が設けられ、戦争

罪人が逮捕されて軍事裁判にかけられるというニュースね。

せつ うちの人は、ミニス一匹殺せない男です。大丈夫ですよ。

佐山 北京や上海にも法廷はあるそうだがね、もう六千人近い兵士が逮捕されてしまつてる。何も連絡がないということは、大丈夫なんだろう。

せつ 何も好きこのんで戦地へ向かつたんじゃない。ブリキ職人で一生懸命働いていただけなのに、いきなり赤紙がきて連れていかれたんだよ。(泣く)

文子 おばさま。(手拭いを差し出す)

佐山 ……横浜地方裁判所の話を伝え聞いたのだが、上官が責任回避して部下へ罪をなすりつける例もあるらしい。

せつ それで、死刑になる兵隊さんもおるんですか？

佐山 ……ふむ。

文子 ひどい。

佐山 日本は…敗戦で、祖国ばかりでない、大切な良心も失ってしまった…。

せつ 戦争を始めた時から棄ててしまったんですよ。

佐山 ……そう…そう……せつさんの言う通りだ。

文子 (いたわるように)大丈夫？

せつ ああ、郵便局がしまつてまう。どうもありがとうございました。あの御札は、
佐山 いらぬ。さあ、気をつけてー。
せつ はい。今度DDTまかれたら「わしは虫けらじゃないぞ」と言つてやります。

せつは文子に見送られて去る

佐山は窓に向かう

佐山 雨雲だな。おい山本くん、もうおしまいにしよう。

山本の声 「はあい、片付けてます」

佐山 (ふと)おしまい、か。(文子が手がけている着物を手に取る)

戻つてきた文子はその姿を見守る

佐山 おう。(慌てて手を離す)

文子 それ、母さんの着物を仕立て直してー。

佐山 ……。

文子 もう、和裁の仕事もなくなってきました。

佐山 ふむ…洋裁学校へは生徒が殺到したそうだな。

文子 私も…。

佐山 なに？

文子 夕飯の仕度をします。

佐山 山本君にも食へていつてもらつたらどうだ。

文子 でも…。食へて下さるかしら。

佐山 仕事が終わつたんだ。当分来ないだろうから強く誘つてみるよ。

文子 はい、いわしが手に入りましたから。

佐山 ほつ、自由販売の。

文子 (玄関へ)山本さん、どうぞ中へ。(と言いながら奥へ去る)

やがて山本が上がり框まで来る

山本 終わりました。
佐山 いやあ、すまんかった。
山本 もう雨漏りはしないとします。
佐山 助かったよ。(雷が鳴るので)君の予想通りだな。
山本 春の雨は、激しいですから。
佐山 桜の散るのを泣いて見送っているのかな。
山本 では、自分はこれでー。
佐山 おいおい、晩御飯くらい食べていってくれよ。
山本 いえ、ご迷惑になりますので。
佐山 何言ってるんだよ。大工仕事の手間賃は受け取ってくれない、メシも食わずに帰られてはこちらの気持ちが悪まるん。

間

佐山 さあ(山本の背中を押して中へ招き入れる)
山本 すみません。
佐山 足を崩して。
山本 はい。(と言うものの、固いまま)
佐山 少し安い酒があるんだ。(奥へおい。
文子 (声)「はあい」(やがて姿を出して)お疲れ様でした。何もなければ、食べていて下さいね。(テーブルの上へ小鉢を並べて)
佐山 湯のみ。
文子 はい、どうぞ。(出して奥へ去る)
佐山 さっ、いっぱいやろう。
山本 ありがとうございます。(酒を受ける)
佐山 (一息に飲んで、黙っている山本に)どうした。
山本 ……(涙ぐむ)
佐山 山本――

山本 ……こうして、桜を眺めながら、再び酒を飲めるとは…。
佐山 ふむ。

雨が激しく降ってくる

間

佐山 (雰囲気を変えるように) 雨漏りは大丈夫のようだな。さすが名大工の腕だ。

山本 いただきます。(酒を飲む)

佐山 郡上では、今ごろ田植えか。

山本 はい。

佐山 土を耕し、水を引き、苗を植える…。それもよし、いやそれがよし、だ。国破

れて山河あり。山本くん、これからは文化の時代だよ。文化の語源はラテン語
のクルトウラ。
くるとうらー

山本

佐山 ふむ。栽培、耕作、つまりは耕すということさ。これからの日本を君達若い者

が開拓していくんだ。

文子 (追加の料理をお盆に載せてくる) 飲めないお酒を召し上がるからおしゃべり
になつてー。

佐山 ふふ…。つい説教口調になって。教師の悪い癖だ。

文子 有り合わせのものばかりですが。

山本 おいしいです。

文子 ほんと？

山本 はい。

文子 嬉しい。

佐山 山本くんー

山本 はっ？

佐山 家庭はいいもんだ。

山本 ……はあ。

文子 お父様。(たしなめる)

佐山 どうだ、ほんとに、所帯を持たんか。

雷の音

文子 ……(山本を見つめる)

佐山 ご両親も空襲で亡くなられた、その空白は新しい家族を作って埋めていくより他ないだろう。

稲妻が走り、近くで落雷の音。

「キヤッ」と叫び、文子は思わず山本にすがる。が、咄嗟に山本は文子を突き飛ばす。電気が消える。

佐山 また停電か、ローソク、ローソク……。

山本 (叫ぶ)許して下さい、許して下さい！

佐山 山本くん！

文子 山本さん！

山本

(憑かれたように)自分は、中国で、罪のない母子を撃ちました……母親は子供をかばい、自分を睨んでこう叫びました。トン、ヤンキー……。自分は犬畜生です、否、犬畜生以下です。家庭を持つ資格なんかありません、生きていて仕方のない人間です……。ああ……。 (謝罪を乞うかのようにがむしやらにひれ伏す)

再び稲妻と落雷

長い間

佐山はローソクに火をつける

佐山

……丁度、今ごろの時分だったかな、学校で君は私に聞いた。校庭の木々でさえずる鳥たちは、激しい雨の時、どこへ行くのですか。私にも不意の質問だったので……この鳥たちは過ぎてゆく春を惜しんで鳴く惜春鳥という。来年の春まで山へ戻り、ひそやかに過ごすのだろうか……ふふ……いい加減な教師だったな。

文子は山本の丸い背をそつとさする

山本 ……おかしな気持ちですが……足が不自由になり……親がない現実に……ふと気持ち安らぐときがあるんです……。

佐山 ……一人、ひとり……心の傷跡は……深い—

文子 いけない、いわしを火にかけたまま。

文子は用心しながら去る

山本 (低く歌うよ)ここは御国を何百里 離れて遠き 満州の…。(酒を飲む)
佐山 ふむ。(酒を注ぐ)

ガタンという音がして、絵美が逃げ込んでくる

佐山 誰だ。

絵美 —私。

山本 お邪魔しています。

絵美 山本さん—

山本 はあ。

文子 (奥から来て)絵美!

絵美 お姉ちゃん!(文子にしがみつく)

文子 どうしたの、あら、服も破れて…。

絵美 男達—

文子 男達がどうしたの?

絵美 こわい!

佐山 絵美、落ち着いて話さない。

文子 絵美。(手拭いで顔を拭く)

絵美 あの、ミッキーが追っ払ったチンピラたちが絡んできたから逃げてきた…。

文子 追いかけてきたの。

絵美 必死に走ったけれどー(カタリという物音)怖い!(文子にすがる)

山本 その男たちって、駅裏にたむろしてる連中だね。

絵美 (震えつつ頷く)

山本 どうもご馳走様でした。(立ち上がる)

文子 どこへ行くの?

山本 ダニみたいな奴らだ。ひとまず逃げおおせても、いずれ見つかる。

佐山 山本くん、やめたまえ。

絵美 そうだ、ミッキーに知らせる。

山本 絵美ちゃん、アメリカ兵は本気で日本人を守っちゃくれませんよ。ふふふ……

どこかでこの命役に立てたかったから丁度いい。

文子 やめて!

佐山 先生、学校へ戻って下さいね。

電気が復帰する

絵美 イヤ!(破れた服を手拭いで覆う)

山本 (避けるように)では。(行きかける)

文子 (必死に止める)やめて!相手は命知らずなのよ。

山本 それはお相子です。

文子 お母様の故郷で田んぼを耕すんですよ。(なおも必死に止める)

山本 ……

文子 折角生き延びた命を粗末にしたら死んだ仲間にも済まないと思わないの!

山本 それはー

文子 もう一度、もう一度ちゃんと生きてください……生きていきましょう。

山本 文子さんー

時計が六時を打つ

長い間

佐山 文子の言う通りだ。山本くん、否応なく新しい時代が始まっている。(ラジオ

をつける♪カムカム エブリボディのメロディーが流れる。)私は嫌いだ
がね、この通りだ。(ラジオを切つて)君の言うように学校へ戻るよ、まず、生徒
に謝る。

山本 ……また、万葉集を―

佐山 万葉集もやるがね、始めに教える歌は決めてあるんだ。しらじらと 桜の花の
咲く見れば 干戈(武器)を捨てし 春のしずけさ……(土岐善麿)

山本 干戈を捨てし……

佐山 ああ、武器を捨てたこの静かな春を大切にしよう。

文子 お父様……

佐山 もう戦争に向かつていくことはなしだ。

山本 ……

佐山 もし、その連中が押しかけてきたら、君の戦争体験をぶつける。戦後をかるう
じて迎えた私たちは、今、何を為すべきかと。

山本 先生。

佐山 ふふ……。これは自分自身に言い聞かせているのさ。私たちは臆病だった、だか

ら、だからこそその民主主義なんだと……。ふむ。

山本 ……すみません。

佐山 謝るのは私の方、否、もうやめよう。人間未来に謝つちやだめなんだ。頭を垂
れば風は重く、顔を上げれば……。風は……。爽やかだろう。

絵美 私……。わたし……

佐山 絵美、オーディション受けると言ったな。

文子 お父様、今は――

佐山 勘違いするな。絵美の道を妨げようとは思わぬ。

絵美 お父さん――

佐山 だがな、専門の審査の前に、古い私の胸の内に響くかどうか、歌ってみてくれ
んか。

文子 でも、今、声をあげたら――

佐山 そんなことを恐れていたら、東京でなんか生きていけんぞ。

絵美 ……

佐山 母さんも聞いている、さあ。

文子 絵美。
絵美 (山本を見る)
山本 (頷く)

絵美は立ち上がり、母の遺影を見つめ、
やがて「愛のスイング」を歌いだす。

絵美 ♪屋根が見えます 赤い屋根が

いつの間にか雨はあがり、
桜の花が行く春を惜しむかのように静かに散る

幕

「愛のスイング」(作詞／藤浦○ 作曲／平川英夫 当時 池真理子が歌った)

「証誠寺の狸ばやし」のメロディーで

Come, Come, Everybody (平川唯一作詞、中山晋平作曲、飯田信夫編曲)

Come, come, everybody, How do you do, and how are you? Won't you have some
candy,

One and two and three, four five? Let's all sing a happy song. Sing tra la la la la.

1946年 昭和21年、NHKラジオで平川唯一(タナシ)さんの英語会話の放送が始まりました。、「証誠寺のタヌキ囃子」を替え歌にして「カム・カム・エブリボデイ」の歌詞で始る放送は、月曜日から金曜日までの毎日午後6時から始る15分番組でした。難しい文法や使用頻度の少ない単語は一切登場しない事で人々に親しまれ放送は、昭和26年までの5年間続きました。